

特集 社会と共に生きる酪農を目指して

酪農を通じて、持続可能な社会に貢献！

6

「人のため、牛のため、自然のため」が経営理念

牧場の仲間みんなで酪農のすばらしさを伝えたい 北海道 中野牧場

土壌分析に基づいた確かな土づくりで自給飼料を育て、乳牛の長命連産を実現し、高品質な生乳を生産。また労働環境も充実させ、高いモチベーションで社員が一丸となって日々働いています。代表取締役の中野大樹さんにお話を伺いました。

就農して21年、経営者となり 改めて酪農の仕事に向き合う

北海道南東部に広がる、広大な十勝平野の北西に位置する鹿追町。酪農が盛んな十勝エリアでもトップクラスの生産量を誇る酪農地帯です。中野牧場はこの鹿追町で昭和20年代に創業しました。「祖父の代に始めて父が2代目、そして、自分が3代目です」と語る株式会社中野牧場代表取締役の中野大樹さん。

子どものころから、「お金ももらえりし、働いてから食ったメシがおいしかった」と牧場を手伝っていました。が、仕事にしようとはっきり決めたのは高校時代。

「サラリーマンになって人に使われるのはいやでした。酪農の仕事は実力次第で成果も出るし、自由度も高い」と、高校卒業後、すぐに実家で就農するつもりでしたが、父の繁実さんから「よそで経験してこい」と言われ、北見のホクレンの訓子府実証農場で1年間の実習を経て、翌年、中野牧場に入りました。

「自分が就農した21年前は、父母、自分、社員2名で働いていました。当時の頭数は総数300頭ほどで、搾乳牛は130から140頭。中規模の経営です。今と同じくフリースタイルで、放牧も行い、飼料畑に作付けして収穫、バンカーサイロにして、自給飼料を主体に与えて飼う、というやり方です」

それから、ご自身いわく「自分は仕事ができる」と天狗になって仕事していた。十数年ののち、2018年に経営を引き継ぎます。

「父から『次はお前だ』と言われて、焦りましたよ。目に見えない重りを背負ったかのように感じた」

代表取締役になれば、社員の生活の重みを全て担うことになり、全ての責任がかかってくる。そのとき、一緒に働く人の大切さや、自分の視野が狭かったことにも気づいたという中野さんは、先輩経営者の話を聞きたいと思いい、北海道中小企業家同友会に入会します。そこで学んだことから、「人としてどうあるべきか、人として成長したい」という点に考えがフォーカスするようになり、酪農の仕事を通して成長したいし、酪農のすばらしさを伝えたい」と言う中野さんは、「人のため、牛のため、自然のため、社員全員が一丸となって学び共に成長しあえる牧場へ」という経営理念を作りました。

「自分は何のために酪農をしているのか、ということですよ。経営者が『金のため』なんて言ったら、社員だってモチベーションを持ってない。『何のため』を明確にすることが必要だと思いました」

その経営理念をまとめた「中野牧場コンセプトブック」も作成。表紙には、看板にも掲げている中野牧場のシンボルマークが印刷されています。

組織内部の魅力を高め 酪農で雇用創出を

現在、中野牧場では研修生3名を含む18名が働いています。

「うちの社員から『働いてみない?』と言われてやってきたケースも3名ほどいます。求人広告で人が来ないのはわかっているの、それより、『友達も誘いたい』と社員に思ってもらえるような組織内部を作ることが重要」と考え、雇用条件、労働環境を充実させてきました。

「労働時間は大事ですが、いい休日、いいプライベートを過ごせないといい仕事はできないと考えています。4週8休、1日8時間を守り、8時間以上かかる仕事は割り振らないようにしています」

因みに、相性が悪い人は顔を合わせるのが最小限になるようシフトを調整するなど、休みが多いことは職場のもめごとを減らす効果もあるそうです。



上:遠くに大雪山国立公園の山々を望む放牧地で、思い思いに過ごす牛たち。日中放牧地で過ごすことで運動にもなり、牛のストレスも減るそうです。
下:「牛舎の扉を開け、出ていかどうか牛に選んでもらいます。雨の日は出て行きませんね」と中野さん。牛舎1棟ごとにローテーションで放牧場に出ています。

経営理念「人のため、牛のため、自然のため」を共に実践していく、仲間たち。



区分けされたボックスが並ぶターンテーブルがゆっくり回転するロータリーパーラー（搾乳施設）。牛は自分でボックスに入り、エサを食べている間に搾乳され、1周すると出ていきます。



ハーベスター（収穫用の農機具）で刈り取りながら切り込んだ飼料作物を貯蔵して乳酸発酵させ、質の高い粗飼料を作っています。



**土を良くし、草を良くし
牛も健康で長命連産に**

中野牧場では「土を良くして、草を良くして、自分で作った牧草やデントコーン」を牛に食べさせる。そうすれば乳も良くなるし、海外の購入飼料も減らせる」と、父の繁実さんの代から28年ほど、大樹さんも10年以上、土壌研究グループ「北海道

「あの人がいないとこの仕事ができない、ということはないようにしたい。遅い・速いはありませんが、誰もが、継続していれば実力はついてくると思います」と中野さん。「今後さらに雇用を増やし、地元の子どもの就職場所を増やしたい」と地域での雇用創出にも意欲的です。

牧場の仕事は、現在、哺乳部、飼料部、繁殖部、乳質管理部、管理部の5部署に分けられ、担当業務のジヨブローテーションも実施しています。



株式会社中野牧場代表取締役の中野大樹さん

「規模拡大を意図してはいませんが、自然に増えています。土地の広さに牛の数が見合っていることが大事です」と、「数」よりも、「質」を重視。ここへ、3年のうちには、子牛も全て自牧場内で飼えるように施設を作りたいといいますが、それは頭数を増やすというより、牛が生まれてからずっと面倒をみたい、という意図から。「生まれた子牛を、外部に預託して大きくなって帰ってくるのと、自分の手で大きくしたのは、社員の気持ちも違ってくる。搾ることだけを考えると酪農の仕事をするのは、自分自身でも納得できません。うちの牧場で生まれた子牛を、世話をし育て、今度はその牛が子牛を生んで、乳を搾らせてもらい、最後には、あ

「SRU」に参加しています。「土を良くすると言っても感覚だけではだめで、科学的根拠が必要です。圃場ごとに、また年ごとに変わってくるので、土をニュージーランドの機関に分析し、そのデータから補うべき成分を判断して、どのような施肥をするか決定しています。必要な成分を必要だけ土に入れ、過剰にしないことも重要です。土が整っていると必要な肥料の量も減るし、手間も省けるんですよ」と言います。

その結果、NON-GMOで年間を通じて40%以上の乳脂肪分という高品質な生乳の生産を実現。また、牛も健康で長命連産となり、現在は総飼養頭数855頭、搾乳牛410頭（取材時）。

「私が必要なものが他人の必要なものである場合もあり、またその逆もあります。それを循環させることでロスが減る」という中野さん。「酪農は自分一人だけでできるものではないし、地域全体でメリツトのあるようにしたい」と考えています。地域の中で、自然の中で、循環型の持続可能な酪農を続ける中野牧場。そのあり方は、今後ますます多くの人に、酪農のすばらしさを伝えていくことでしょう。

**地域の中で循環させ
ロスも環境負荷も減らす**

中野牧場では、地域との連携も大切にしています。

北海道の畑作の基幹作物のひとつでもあるビート（てんさい・砂糖大根）から、砂糖液を搾った残渣を乾燥した「ビートバルブ」を与えているのも、地域でとれたものを循環させるという意味があります。

また、近隣の畑作農家との連携では、小麦を刈り取ったあとの廃棄物となる麦稈（麦わら）を、牛舎の寝糞として受け入れる一方、中野牧場からは、堆肥（牛の糞尿と牛床の敷料などの副資材から作られる固形物）やスラリー（糞尿混合物で液状）を、肥料として供給。「スラリーの散布で、化成肥料のリン酸やカリウムを削減することもできます」

「私が不要なものが他人の必要なものである場合もあり、またその逆もあります。それを循環させることでロスが減る」という中野さん。「酪農は自分一人だけでできるものではないし、地域全体でメリツトのあるようにしたい」と考えています。地域の中で、自然の中で、循環型の持続可能な酪農を続ける中野牧場。そのあり方は、今後ますます多くの人に、酪農のすばらしさを伝えていくことでしょう。

子牛のいる哺乳舎、離乳後、出産するまでの若い牛のいる育成舎、搾乳牛がいるフリーストール牛舎などが整然と並ぶ中野牧場。正面には社員皆で考えたシンボルマークを掲げています。